



イケン先生の『恐縮ですが…一言コラム』

第 605 回 病気と闘うのやのうて、病気と親しうするのや…

2014.11.30

人間、誰でも、どんな時でも「病気」になる。

医療技術が進歩したおかげで、多くの病気が治るようになったとはいえ、まだまだ「難病」と言われる厄介なものがいくつも存在している。

当然、国の難病対策の見直しも進められている。

見直しは、今年5月のいわゆる「難病法」と「改正児童福祉法」の成立を受けて始まった。

その結果は、医療費が助成される疾病や患者の数は大幅に増える反面、自己負担額が以前より増える人も出てくる。子どものときは助成の対象でも、大人になると外れてしまう課題も残っているようである。国や地方自治体の難病に対する取り組みは評価できる部分も多々あるが、「道半ば」の感が強いようだ。

医療費等の経済的支援も重要だが、患者本人やその家族への精神的支えは、まだまだ十分とは言えず、耐えがたい苦痛を強いられているのが実情である。

僕の親しい、大切な友人たちが、これら「難病」に罹り、とてつもない苦勞をしている状況を見ると、居た堪れない思いでいっぱいになる。

「頑張れ！ 病気と正面から向き合って、闘って…」そんな言葉しかかけられない自分が、虚しく、何もしてあげられない自らの無力さに、ただ、落胆するだけであった。

そんな時、松下幸之助翁が、亡くなる少し前にドクターに語った言葉に巡り合った。

「きみな、病気で入院したら、よく闘病という言葉を使うやろ。

けどわしは、それは嫌いやねん。

病気と闘うのやのうて、病気と親しうするのや。

親しうすると…、

「しんどいから横になれ」「眠いから寝ろ」「喉が渴いたから水を飲め」といった具合に、病気のほうがわしに、「こうしてくれ、ああしてくれ」と言いよる。

そやから病気と仲良うせなあかん。闘病という言葉を使うたらあかんで…」

病気と闘う…とは、病気は敵だから、つまり最初から私たちの心が「病気を敵視するから」に他ならない。いつの間にか「敵としての病気の姿」を作り出し、それを攻撃しようとしている。

かの、フローレンス・ナイチンゲールはその著書『看護覚え書』で、こう、述べている。

「病気とは、私たちが自ら招いてしまったある状態に対する、自然の思いやりのこもった

“はたらき”であると考えられないだろうか」…

悟りに近い松下幸之助氏の終焉の言葉と、何か通じるところがある。

不治の病を宣告された羅漢者の心情を理解するなど、恐らく僕には出来ないだろう。

そんな、だらしない僕が、松下翁の言葉で少しだけ癒された。

もし自分がその場面に直面したら、この言葉を何回でも繰り返そう…

そう心に誓い、そして彼らにも、この言葉を伝えたい、そう思った瞬間であった。